

に深く入りこんだフィヨルドがあり、湾奥の海岸から9km 内陸にある氷成湖カラー・レークのほとりに基地がある。氷舌は北や東から谷に沿って押出し、海拔100m位の所に終っている。動物達はどうしてこの様な周囲を閉された場所に棲みつることができるのであろうか。氷河の辺縁の自然はきびしいが、夏の間、水は豊富であり、見通しが好い。見通しに恵まれていることは、足の早い動物には防衛に好都合である。フィヨルドが凍結し、氷河のクレヴァスが新雪に蔽われる季節には、動物達の移動は容易になるだろう。

植物の種類は意外に豊富である。こけや草本ばかりではない。アークティック・ウイロウ（柳の種類）もある。併しそれは地をはってあり、おぼろげの莖ほどの幹の太さで、殆んど立ちあがりを見せていない。このことは8月10日にこゝを去るまでの生活で、自らの人間の身長のために、全く身のおき所がなかったという経験に通じている。

生活の空間に蔭のないことは不便なものである。その上、北極の夏は全く夜蔭がない。夜中も常に陽光と青空のもとである。曇天の日も、陽は高い。日常の生活は、言ってみれば蔭を利用する生活であることを痛切に感じた。小用を足したくても常にかくれる所がない。せめて100m位離れた所まで歩いて、背を向けて用を足す。その位の距離では救いにならないのだが、せめて最低の礼儀なのである。

北極では氷期が終ってしまったのではない。氷期のマキシマム以後縮少をつづける氷床が、未だそこに残っている。氷河を砦とする動物相がその周縁に棲みつぎ始め、これを追って人類が北上している図式を如実に知ることができる。実際、ユーレカでは石油の試掘に成功し、これをパイプラインで運ぶことが、さかんに論議されている。

（1972年9月28日）

15年振りのニューヨーク

正井 泰夫

1972年8月下旬、私は正に15年振りにアメリカのニューヨークを訪れた。1957年12月、ちょうどクリスマスころに、当時留学中であったミシガン州のイーストランシングから、高速道路を突走って、世界経済の中心であるニューヨークを見ることができた。それからもう15年もたってしまった。

1957年のニューヨークは、高度経済成長期に入る前の日本から訪れた者にとって、正に驚ろきの連続であった。フィラデルフィアから北東にのびる高速道路を走っていくと、ちょうど夕方になった薄暗い空に、満鑑飾のマンハッタンの灯が、あたかも山のように迫ってくるのであった。必ずしも新しいものばかりではないニューヨークのマンハッタンではあったが、石と煉瓦と鉄とコンクリートで固めたその都市景観は、ひ弱な感じの強い日本の都市を見慣れた目には、きわめてどっしりとしたものとして映った。アメリカの地方都市と比べれば、人々の態度はぎすぎすとし、親切心にも欠けているようであったが、それでも豊かさの象徴としてのニューヨークの存在は、しっかりと脳裏に刻みこまれた。

1972年夏。クリスマスどころと違って夏の蒸し暑い日であった。15年前と比べると、超高層ビルの数は大いに増えている。だが、未だに完成したものとしては、1931年にできたエンバピアステートビルが最高であった。南部に110階の世界貿易センタービルが完工間近かの数を突出させてはいたが、15年間に、ニューヨークは景観的に大きな質的な変化をとげたとは思われなかった。もちろん、よく見ると、地味ではあるが非常に立派なガラス張りの数十階の超近代建築が林立しており、東京とは比較にならないほど高層化が定着していることも事実であるが。

昼間のタイムズスクエア。それは、昔のあまりきれいでない姿を未だに保持していた。夕方になると、人通りははるかに増える。それにもましてものすごいのは、真夜中である。ラッシュアワーを思わせるほどの人出で、しかも黒人が半分あるいは半分以上を占めている。黒人たちは、白人以上に派手な服装をし、表情が豊かで、そして大手を振って歩いている。

ニューヨークの五番街。アメリカン、あるいは世界一の高級商店街である。アフリカンルックのニューファッションをした黒人女性と、どうしてあかもすらっとしているのかと思えるほどのすらっとした一分のすきもない黒人紳士が歩いている。道ゆく人はちらちらと振り返って見る。

そういえば、アメリカの街の生活で最も大きな変化は、黒人の台頭のようなものである。ワシントンでもニューオーリンズでも、一流ホテルにおびたゞしい数の黒人が泊っていた。アメリカは急速に変りつつあるのだ。

京 都

内 藤 博 夫

10月下旬、5年ぶりで京都を訪れた。それまでに3回京都を訪れる機会があったが、そのうち